

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	『日はまた昇る』の信仰——Technically Catholic に込められた方向
Title(English)	
著者(和文)	上西哲雄
Authors(English)	Tetsuo Uenishi
出典(和文)	ヘミングウェイ研究, , No. 15, pp. 45-55
Citation(English)	The Hemingway Review of Japan, , No. 15, pp. 45-55
発行日 / Pub. date	2014, 6

『日はまた昇る』の信仰

——Technically Catholic に込められた方向——

上西哲雄

はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の最初の長編小説『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) を宗教という角度から読むことは、1980 年代に H・R・ストーンバック (H. R. Stoneback) が、ヘミングウェイの伝記的なバックグラウンドとヨーロッパにおけるローマ・カトリックの信仰の枠組、とりわけ巡礼の伝統を踏まえた本格的な論を立ててヘミングウェイ研究史の前面に出た。その後のストーンバック自身を中心とする研究の蓄積により、今や宗教というアプローチの適非を問うレベルを越えてその内容、つまりは、この作品でヘミングウェイは宗教の何を表現したかったのか、あるいは作者の意図を越えてヘミングウェイの宗教に対する何がテキストに表出しているのかを明らかにすることが課題である¹。

その際に、あらためて『日はまた昇る』の宗教性について議論を進める上で鍵となるのは、12 章の釣りの場面で主人公ジェイク・バーンズ (Jake Burns) がその信仰を正面から尋ねられた際の返答だ。12 章が物語前半のパリでの日常生活と後半のスペインでの休暇との中間にあつて両者を橋渡しする位置を占め、その中で宗教を巡るジェイクのこの返答はこの章の一連の会話の結論であるかのように最後に位置し、主人公がこの返答によって最もあからさまに自らの信仰を告白する箇所となっているからである。「本当にお前はカトリック信者なのか」と真正面から聞かれた主人公は、“technically” (128) と答える。これはどういう意味なのか。

場面は、ジェイクが日常生活を送るフランスのパリから、休暇を取って闘牛見物をしようとスペインに入り、闘牛の祭りが始まる前のひとときを、釣りで楽しむために立ち寄るスペイン国境の町ブルゲーテでのことだ。友人のビル・ゴートン (Bill Gorton) と二人でホテルに泊まった翌朝、近くの川で釣りをするエピソードである。釣りのエピソードと言ってもテキストのほとんどは、二人のとりとめのない会話で構成される。会話は朝起きてから長々と続

くが、特に釣りを終えてワイン・ボトルの口を開きランチを始めての会話は、戯れ言の中でとは言うものの、当時進化論裁判でファンダメンタルなプロテスタントとして有名になった政治家ウィリアム・ブライアン (William Jennings Bryan), 高名なエキスコパル派教会の牧師ウィリアム・マニング (William Manning), 20 世紀初頭のプロテスタント教会の最大の「成果」とも言うべき禁酒法成立の立役者ウェイン・ウィーラー (Wayne B. Wheeler) 司法長官に言及するなど、当時のキリスト教、特にプロテスタントにつながる話題に終始する。ワインが尽き眠気をもよおした二人は昼寝を決め込むが、眠りに落ちる直前つまり会話の最後に、一連の会話の結論のようにビルが主人公ジェイクに問いかける。戯れ言の連鎖から一転、真剣な質疑となる瞬間だ。

“Listen, Jake.” He said, “are you really a Catholic?”

“Technically.”

“What does that mean?”

“I don’t know.” (128–29)

“Technically a Catholic” とはどういうことなのか。

ストーンバックは 1983 年に発表した論文の中で、“technically” という言葉の含意を語り手が自分の信仰に “skeptical” であることを示しているとする一連の先行研究に対して、ここでは “technical” という言葉が語源的に本来持つ「熟練した」、「手馴れた」という意味で使われているとし、信仰のレベルが高いことを示すものと解釈している (33)。ストーンバックはまた 1986 年の論文の中で、ジェイクは洗礼を受けて長く経過しているとし (19)、ジェイクに自らの信仰についての疑いはなく、高い次元で一層の信仰の深まりを求めていると解釈している。「熟練の信者だよ」と答えたというわけだ²。

これに対して、2013 年 12 月 22 日に開かれた日本ヘミングウェイ協会の全国大会のシンポジウムの中で講師の山本洋平は、『日はまた昇る』発表から 3 年後の『武器よさらば』(Farewell to Arms, 1929) において、“The Austrians are Christians —except for the Bosnians.” / “I don’t mean *technically* Christian. I mean like Our Lord.” (178) と、キリスト教徒の質について “technically” としていることに着目する。そこではイエス・キリストと対照させる文脈から明らかに「厳密に言えば」という程度の否定的な意味で使われていると指摘し、作者が同じ言葉を『日はまた昇る』で違った意味で使うとは考えにくいとする。ストーンバックの解釈を『武器よさらば』でも採用するなら、われらの主イエス・キリストは熟練のクリスチャンではないということになってしまう。

つまり、ストーンバックによればジェイクは自らの信仰に疑いを持つどころか、「熟練のカトリック教徒」と自らの信仰に対する確信に満ちていることになるのに対して、山本の解釈では、ジェイクはカトリック教徒としての自らの信仰に留保をつけていることになる（山本は本特集の掲載論文でも言及）。

『武器よさらば』では“technically”という言葉が使われるやりとりの文脈から、その意味はおのずと明らかとなるが、『日はまた昇る』の場合はやり取りが唐突である。『武器よさらば』で“I mean like Our Lord”（178）というような解釈を助けるはずの追加のやりとりは“What does that mean?”／“I don’t know.”（129）と、むしろ解釈を拒否するような構造となっている。そこで、本論では文脈の範囲を広げつつ、“technical”のこの物語における意味を追求しながら、この物語に宗教を巡るどのような問題が提起されているかを明らかにしたい。

1. 物語としての 12 章の会話

12 章の会話は、釣りの後のランチでのやり取りだけでなく、朝起きてから一貫してしかし散漫な冗談交じりの軽口に終始する。

会話はまず、朝起きて朝食をとるまでの間に交わされる。ビルがまだ寝ている間に釣りの餌を取りに行ったジェイクの勤勉ぶりを、ビルが揶揄して始まる。朝食をとりながら続く会話の中でビルは、新聞記者であるジェイクが小説を書くことについての教訓を開陳し、さらに、アメリカ人のジェイクがパリで作家になろうとすることを非難しつつ、作家としてあるべき姿勢について追求する。軽口のやり取りのオブラートに柔らかく包まれてはいるものの、このやり取りには、ビルとジェイクの間でジェイクの仕事ぶりに問題があることになっているように感じさせる何かがある。

少なくともジェイク自身が問題を抱えていると自覚しているように思われるのは、その反応だ。ビルに作家の姿勢について問い詰められた時に、ジェイクは反論するのではなくて、“Go on,” I said “Who did you get this stuff from?”（120）と、もっと詳しく聞きだそうとしている。仕事について、彼の中に迷いがあることを窺わせる。さらにジェイクは、自らの生活が根無し草で酒とセックスに明け暮れるものであるようにビルに言われて、思わず“When do I work?”（120）と言いつつ。自らを不労の徒であるかのように言い募るビルの戯れ言を笑って無視できないところに、仕事を巡って何かわだかまりを抱えていることを感じさせる。

このように見るとこの箇所は、全体としてはビルが繰り出す冗談の数々に

ジェイクが軽妙に応じる形で進むものの、会話を覆う冗談を剥がした後に浮かび上がるのは、仕事についてジェイクが何がしかの問題を抱えているということだ。

この後、釣り場の移動と釣りについての場面が淡々と進行し、ランチになって会話が再開する。ここでは先に紹介したように、朝食までの会話とは違って話題が宗教に関係することに集中する。宗教を巡るここでの会話からも、同じように冗談を剥がすと残るのが、まさに語りの最後に来るジェイクの信仰についての質疑であることは、すでに確認したことだ。しかもその結末は、“Technically” というジェイクの返答である。

このように 12 章の会話の構成を見ると、これをひとつの物語として読んだ時 12 章の会話で構成される物語の骨格は、仕事について問題が提起され、宗教の会話の中でその答えが出される形になっている。では、ジェイクのカトリック信仰がジェイクの仕事の問題に対して一体どのような答えになっている、それが “technically” とはどういうことなのか。

2. ジェイクの勤勉と仕事観

『日はまた昇る』は、パリで無軌道に暮らすアメリカの若者の生態を生き生きと描いているため、一見したところ地道に働く庶民の日常生活とはかけ離れた物語のようだが、語り手ジェイクの言動を注意深く拾っていくと、謹厳実直に働く姿が浮かび上がる。

たとえば、繰り返し遊びに誘いだそうとする友人達に付き合う彼だが、それは仕事をしていないように見せるのがこの世界のルールであるからであり、「電報を打たなければ」と言い訳をしながら早々と仕事に戻るすべを身につけている (2 章, 19)。実際にオフィスに戻ると、2 時間にわたって熱心に働いたとされている (2 章, 20)。深夜に突然訪れたブレット・アシュレー (Brett Ashley) に誘いを受けても、明日仕事があるからと断わり (4 章, 41)、翌朝早くからオフィスの仕事を片付けて、外務省の記者会見に駆けつける (5 章, 44)。帰りは途中まで記者仲間とタクシーに乗るが、どこか一杯やりに行くのではなくて、まじめにオフィスに戻る (5 章, 45)。そこにロバート・コーン (Robert Cohn) が待っていて、誘われて昼食を一緒にするが、話し続けたようなコーンを尻目に再びオフィスに戻る (5 章, 47)。

言うまでも無くこの物語は、パリのサラリーマン生活を描いているのではなくて、後半のスペインにおける闘牛こそが核心であり、ジェイクの日常生活においてもそのことを楽しみに勤勉に働いていることを、忘れるわけには

いかない。旅行の直前には残業をして旅行中の仕事を前もって片付けているし(8章, 75), 闘牛の祭りが終わり、パンブローナに集っていた語り手の友人達が三々五々帰路につく中、語り手はもうしばらくスペインにとどまろうとする。ただそれは気まぐれにではなくて、もう一週間は帰らなくて良い(19章, 232)と、仕事の段取りの中に事前に組み込まれたものであることが、ことさらに述べられている。

この勤勉な働きぶりについて問題を抱えているように思われるのが、12章の会話の前半であったのは既に見た通りだ。勤勉に働く何が悪いのか。

ジェイクが自らの生き方についてあれこれ考える場面がある。ブレットとの関係について煩悶する場面で、行動には対価と債務が伴うと考えが行き着き、思いは“You worked for something”(14章, 152)と働くことに及ぶ。上で見たように、ジェイクはスペインに行くことを目標に勤勉に働くことが彼の日常ではあるが、逆に言えば彼の勤勉もスペイン滞在という対価のために働いているに過ぎないとも言える。勤勉に働くだけの対価を、本当に得ているのか。そのために働く“something”とはスペイン滞在なのか。

彼の思考はそこにとどまらない。確かに「何かのために働く」のは間違いないのだが、“I did not care what it was all about. All I wanted to know was how to live in it. Maybe if you found out how to live in it you learned from that what it was all about.”と、何のために働くかについてとりあえずは考えるのを棚上げし、どのように生きるかを考える中でおのずと分かるだろうとの思いに至る。12章の会話でほのかに見えるジェイクの労働の問題は、棚上げにしているとは言え、問題として抱えていることは確かで、しかも棚上げにした問題の解決は生き方の問題を追及することで自ずと見えてくるとするのである。12章では仕事の問題に対する解答は“technically Catholic”であった。14章のここでは、問題が何のために生きるかに姿を変え、その解答は、生き方の問題のさらに先にあることになっている。

3. 信仰のゆらぎ

ここでひとつ注目したいのは、バリでは会堂に入る場面すらないカトリック教会のミサに“Going down the streets in the morning on the way to mass in the cathedral”(15章, 156)と、スペインでは出席していることだ。スペインではさらに、ミサがない時でもひとり祈るために会堂に入る(10章, 181-85)。しかも、言うまでもなくジェイクにとってスペインのこの祭りを構成するのは、異文化の風俗、酒、興奮など様々な要素であるにもかかわらず、“also religious

festival” (15 章, 156) と、ことさらその宗教性を確認している。一方、パリでカトリックの大聖堂ノートルダム寺院に言及する際も、会堂に入ることもなければ信仰の感慨が言及されることもなく、外から眺めて偉容を賛美するにとどまる (8 章, 147)。信仰があるのならパリにおいても会堂に足を踏み入れるのが自然であるが、一切言及しないのには語り手の意図を感じる。

つまりジェイクはその語りによって、パリは仕事、スペインは信仰というように、空間をくっきりと分けている。パリでの仕事の問題に対する解答は、ジェイクの語りの流れの中では、スペインという信仰の空間にあるという構造が浮かび上がる。これこそが、彼自身が考える彼の現下の生き方である³。

では、このスペインでの信仰生活に、生き方についての何か解答があるのかというと、かなり覚束ない。ジェイクの信仰にゆらぎが垣間見えるからである。9 章で母国アメリカからのカトリックの巡礼者達に出会った際に、理由はともあれ彼らに自らをカトリックと名乗ることはないし、他の乗客に自らの信仰を告白するのは遅い (9 章 93)。ブレットを伴って礼拝堂に入ろうとしてブレットが被り物を身につけていないために追い出されても、何とか入るための算段をしようとするわけではない (15 章, 159)。ブレットにペドロ・ロメロ (Pedro Romero) のために祈りたいと言われて礼拝堂に同道し、入ったものの居心地が悪いと言うブレットの言いなりに祈りもせず退出し、祈ることを勧めると効き目はあるのかと言われ、挙句の果てには “you don't look very religious, Jake” (18 章, 213) とまで言われてしまう。“I'm pretty religious.” と言い返しても、まともに認めてはもらえない。12 章の先に引用した箇所ではビルに “are you really Catholic?” と訊ねられるのもそうだが、周りの人間にとって彼の態度に確信を持った信仰を見るのは難しいようだ。

特に 10 章で礼拝堂にひとり入り祈る場面では、ジェイクの信仰とその揺れがよく表現されている。物語後半の舞台となるパンプローナの町に到着し、一緒に来たビルやコーンとは分かれてすぐにひとりで大きな教会に入る。人々が祈る様子を見、ジェイクはひざまずいて祈り始める。彼の思考の流れを辿ると次のようなものだ。

彼がまず祈ったのは思いつくすべての人たちのため、そして自分自身、知っているすべての闘牛士、そしてまた自分自身のため、という順だ。ジェイクはここで眠気を催したので、闘牛やフィエスタがすばらしいものになるように、いい釣りが楽しめるようにと祈る。次に、彼はほかに何か祈ることはないかと考えて、大金が手に入るようにと祈り、そこで思考は祈りからブレットに紹介されたミピポラス伯爵 (Count Mippipopolous) のことに及ぶ。あれこれ伯爵のことを考えているうちに、ふと自分が祈りの最中にあることを

思い出し、“I was a little ashamed, and regretted that I was such a rotten Catholic” (10 章, 103) と、自らの信仰の無さを恥じ入る。

ストーンバックはこの祈りの流れ、すなわち、自らが嫌う者も含めて他人のために祈り、自らのために祈り、日々の糧を祈った上で、自らの信仰を卑しめるのは、カトリックの様式に則ったものとし、この場面でのジェイクの信仰に疑問を呈してきたそれまでの先行研究を真っ向から批判している (Stoneback 2007, 173-80)。本論は基本的にこのようなジェイクの信仰を篤いものとする立場を支持するものではあるが、“rotten Catholic” という汚い言葉遣いに、むしろ様式の枠を超えてジェイクが真剣に自らの信仰のあり方について悩む生な姿を読みたい。しかも、さらに続いてジェイクは “but realized there was nothing I could do about it, at least for a while, and maybe never, but that anyway it was a grand religion, and I only wished I felt religious and maybe I would the next time” と、漠然とはしているものの “I felt religious” という感覚を、彼の信仰の問題点であると同時に到達目標として掲げている。ストーンバックがこの箇所に限らず繰り返し示唆する信仰の成熟よりも、すでに洗礼を受けているにしても未洗礼にしても、このように問題点の自覚と到達目標をしっかりと持った信仰に、真摯に求道的な態度を見ることができるとは、では、何が問題なのか。なぜ今は “religious” を感じられないのか。

4. 教会の内と外

ここでさらに注目したいことは、教会の中で祈った後にジェイクが外に出て “and then I was out in the hot sun on the steps of the cathedral, and the forefingers and the thumb of my right hand were still damp, and I felt them dry in the sun.” (103) と陽光に手をかざし、まだ濡れていた指が日差しに乾くのを感ずることだ。会堂を出たときに指が濡れているのは、カトリック信仰があるならば必ず誰でも会堂を出入りする際に、入り口を入ったところに置いてある聖水盤に指を浸して十字を切ることによる。ジェイクに信仰があることを示す場面である⁴。

しかしながら、十字を切った指が乾くのを感ずることに、ここでことさらに言及するのはどういうことだろうか。ストーンバックはあくまでジェイクがカトリックの規則に従う敬虔な信仰の持ち主であることを示すことを目指しており、この箇所も “And as the unnamed sign of the cross dries in the ‘hot and hard’ sunlight, Jake ‘crossed over’ (emphasis added), thus inhabiting totally the sign and ritual, the sigil of his prayer.” (2007, 181) と、指が乾いていくのは、会

堂の中で切った十字が、言い換えればそれによる信仰の深まりがジェイクに定着していくことの表象と解釈する。しかし、教会の外に出ると聖水盤の水が自らの身体から乾いていくことを意識するのは、その意識の中で、教会の内でもいくらかでも獲得した信仰や神の恵みが外に出て霧散すること、あるいは霧散することに対する恐れが表象されていると考えるのが自然ではないか。ジェイクの信仰が相当に成熟しているということを前提に読んできたストーンバックはこの場面に来て、やや無理な解釈をせざるを得ないように本論の流れからは思われる。教会の外に出ると頭をもたげる信仰の消失への恐怖、むしろこの方がジェイクの信仰に対する真摯な思いが窺える、というのが本論の立場だ。

そうは言っても、教会を出たところでこのようなことをジェイクに意識させる物語構成は何を示そうとしているのか。特に“felt them dry”の句は、ジェイクが信仰の到達点であるかのように使う表現“feel religious”という記述の直後に、“feel”の具体例のように言及されており、指の乾きはジェイクの信仰の重要な問題に関わるかのようなのだ。その問題とは何か。ここで本論が問題としてきた“technically a Catholic”を思い出したい。カトリック教徒が祈りのために会堂に入る時、聖水盤の水に指を浸し、十字を切って入退堂する。この場面で彼はその指を浸し十字を切ったことは間違いなく、“technical”には、つまりは「技術的には」、この文脈で言い換えれば「形式的には」、カトリックと呼ぶことができる。しかし、“technical”に過ぎないのは、信仰の象徴とも言うべき濡れた指が、教会を出ればあっという間に乾き、教会の外では信仰心が薄くなるためだ。信仰が形式的にクリスチャンとしてやるべきことをやるというレベルにとどまるために、教会の中では機能するが外に出れば消えてしまうのである。

ここで改めて、この教会の内と外という二項対立を本論の文脈に当てはめると、この場面はこの作品における宗教的な構造の要になっていることがわかる。しらふでの仕事を巡る会話とワインを分かち合いながらの信仰を巡る会話（12章の釣りの場面）、パリでの勤勉な生活とスペインでの休暇——こうした二項対立の語りの構造の中でほめかされてきた宗教についての問題、すなわち教会生活と日常生活との関係の難しさが、あからさまに、しかし象徴的に表現されているのが、この教会堂を出て指が乾くエピソードだ。決して交わることの無い教会と日常の二項対立。これが、彼にとって生き方を巡る問題なのではないか。

この二項対立の特徴は、日常と宗教空間が、身体的に異次元ということだ。12章において、会話で信仰の話をするためには、宿と釣り場と空間を変え、

さらに酔いによって身体的に位相を変えなければならない。仕事から解放されて宗教的空間に身をおくためには、パリの教会ではなくて、空間的にスペインという異世界に移動しなければならない。そして何よりも、信仰は教会という異次元の世界でしか向き合うことができず、会堂を出れば信仰はせっかく身体についた聖なる水と共に霧散する。

おわりに

では逆に、教会堂を出ても指が乾かない、信仰が消えないとはどういうことだろう。パリの仕事漬けの日常においても、十字を切った指が乾かない生活、ジェイクが求めるのはそんな日常生活に違いない。信仰に導かれる生活があるべき信仰生活であるとすれば、パリでの生活はどうか。スペインにおいても、教会堂を一步出た外ではどうか。

教会堂における彼の祈りは祈り尽くす祈りだ。神への賛美や感謝ではなくて、この地上の日常生活のすべてについての願いである。友人、知人、闘牛士、闘牛、祭り、釣り、そして自分自身。一見日常生活にとらわれたかのように見える祈りだが、ジェイクによる物語の構造に込められた彼の信仰を巡る苦悩の文脈の中では、逆に日常生活を信仰に基づくものにしようという求道の姿勢が窺える。そう考えると、二度繰り返される自分のための祈りも、人間関係と仕事に多くが割かれているに違いない。さらには、日常生活において願うのではなくて、欲望するのではなくて、会堂に入ってこの世での願いについて祈ることを敢えてするからには、ジェイクはこうした日常生活すべてについて祈ることによって、日常生活に自らの信仰を及ぼすこと、すなわち日常生活を信仰に基づいて送ることを目指しているのに違いない。二度の自らについての祈りのもうひとつは、この自らの信仰生活のあり方について祈ったのではないか。

しかし、教会堂を出ると十字を切った指が乾く現実、ジェイクの生き方の問題の本質はここにある。日常生活を信仰に基づいて送るのではなくて、信仰の方を日常生活に合わせる生き方では、結局社会が教会に、信仰の場に、そして彼の祈りに侵入して内から rot する（腐らせる）のではないか、というのが彼の懸念である。祈りの場面で祈りが消えてプレットや伯爵についてあれこれ考え出すことへの反省には、そうした苦悩が感じられる。

そんな時、20世紀への世紀転換期の頃より、神学や教会生活すら巻き込む科学主義、合理主義礼賛の近代化の波に抗して、聖書に立ち返れというブライアン達プロテスタントのファンダメンタリズムの呼びかけは、問題に答えて

くれるのか。ジェイクが惹かれるカトリックの典礼や教義は、プロテスタント主義教会に比べて遥かに身体性を重視する。このことは、カトリック教会そのものが根本的に科学主義、合理主義礼賛の風潮に背を向ける面を持っている。しかし、そのカトリック教会も、どこまで彼の“feel religion” (103) を確保してくれるのか。物語の現在の時点で、このことについてのジェイクのカトリック信仰に対する確信は、以上のようにまだまだ心もとないように見受けられる。カトリック、プロテスタントの違いを越えて、そもそも生活の中にどのように信仰を確保するのか。この課題を抱えながらジェイクは、プロテスタント・ファンダメンタリストの動きも視野に入れつつ、カトリックの入り口にたたずんでいる。

註

¹ ストーンバックはこのような研究の集大成のように、2007年に『日はまた昇る』の宗教表象を中心とする用語を拾い出して詳細なコメントを付けた『用語集』*Reading Hemingway's The Sun Also Rises* を上梓している。網羅性の点でも読みの深さの点でも氏の研究を上回るものは今のところ出ていない。2013年に刊行されたマシュー・ニッケル (Matthew Nickel) の *Hemingway's Dark Night* は、ストーンバックの研究を継承し発展させたものである。ニッケルによる『日はまた昇る』の解釈は基本的にストーンバックの読みを下敷きに、その宗教表象がいわゆる「氷山の理論」に則った暗示的なものであることに着目し、その暗示性を宗教的な神秘主義につながるものと解釈するものである。本論はこのような読み込むことの価値を認めつつも、まずは物語が展開する上で宗教表象がどのように機能するのかを確認することに注力する。

² ストーンバックは2007年の『用語集』にもこの箇所を見出し語に取り上げて詳細な解説を付けているが、趣旨は変わらない。

³ ストーンバックは、パリでのジェイクの動きがカトリックの様々な史跡を巡る形となっており、そこに巡礼を読み込もうとする (Stoneback, 1983 10-11)。本論はこうした読み込みの価値を認めるものの、ここではジェイクの意識の表面と日常のレベルでの彼の思いに限って論を進める。

⁴ ストーンバックはさらに、オリジナル原稿には “as I went out I dipped my fingers in the holy water and crossed myself again...” (qtd. in Stoneback 2007 180) と、聖水盤に指を浸し十字を切ることがより明示的に記述されていることをファクシミリ版を引用しながら指摘する。

Works Cited

Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. 1926. New York: Scribner's, 1954.

———. *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner's, 1995.

Nickel, Matthew. “Chapter 35: Religion.” *Ernest Hemingway in Context*. Ed. Debra A. Modellmog and Suzanne del Gizzo. New York: Cambridge UP, 2012. 347-56.

-
- . *Hemingway's Dark Night: Catholic Influences and Intertextualities in the Work of Ernest Hemingway*. Wickford, RI: New Street Communications, LLC, 2013. Kindle ebook file.
- Stoneback, H.R. "'For Bryan's Sake': The Tribute to the Great Commoner in Hemingway's *The Sun Also Rises*," *Christianity and Literature*, 32.2 (1983): 29–36.
- . "From the rue Saint-Jacques to the Pass of Roland to the 'Unfinished Church on the Edge of the Cliff.'" *The Hemingway Review* 6.1 (1986): 2–29.
- . "In the 'Nominal' Country of the 'Bogus': Hemingway's Catholicism and the Biographies." *Hemingway: Essays of Reassessment*. Ed. Frank Scafella. New York: Oxford, 1991. 105–39.
- . *Reading Hemingway's The Sun Also Rises: Glossary and Commentary*. Kent, Ohio: Kent State UP, 2007.